



吉波





師翁醉車姓の香海依稱健左衛門  
慈厚ハ梁の遊心潤業井在歸ハ  
其れまの梁沙のたまをのたまむうそく  
依<sup>ハ</sup>社子志を厚くし程より極行を  
つむ子浅くうそを限りて志は第に時ハ  
あつ夫能合子付り是く美濃の納株ハ  
志ハ<sup>ハ</sup>能勤仕知こそこの形を余くを

夢さけし風俗の地を跡されし  
とて一各年一ししとて多様を備へしとて  
かろし後の須磨の親泊をたすしとて  
木曾路の古色をたすしとて  
たろの細尾祖翁の夜話をとて  
十八の珠を携へしとて  
兼のやうにかゝるしとて

されし節笠をたすしとて  
何しや近きとていふ處もあはし  
越路の多しとていふ處もあはし  
とていふ處もあはしとて  
とていふ處もあはしとて  
とていふ處もあはしとて  
とていふ處もあはしとて  
とていふ處もあはしとて  
とていふ處もあはしとて  
とていふ處もあはしとて

あうきむきを風交り人あき厚く喫茶  
練塔の玄窓より新古の瀧流りつゝ  
示されし明のあき篤實の因に風雅の誠  
心より自ら月も輝きおとすことなし  
遠境の佳系より通りしと常を山も水も  
たのむもさうも常盤木の下蔭も度々  
結しつゝ小窓垣根植也るもさうも

そのかきかきりあきもく潤葉井をたつ  
おとすもさうも四つり時の風を喜ぶも梅  
幽窓を透せし竹も茂るも岩も残忘れ  
あき垣根もさうも秋夜もさうも意  
軒西篠のさうもれもさうもさうも  
霧の潔きもさうもあきもさうもあきも  
名跡もさうもれもさうも能因西行もさうも

懐にあらば宗祚兼好のいふにあらざらんを  
法にゆん事をたすて一なるを好む悲心は  
自去り年うかりて安政をせし  
餘をわづらふるをわづらふるを  
うらやまは是玉の結を細くは  
今さらば思ふにさるる果自に  
暑業のわづらふるを復し

いと健康なりしと云ふは自中の  
風即ち際迄やの子然性か  
よく合事の常ありて  
行つて醫療の心を盡し  
見よは同廿二日ありて  
お勉めは権和尚と車師と竹馬の  
友ありて



癖きたる所を下さりて其の如く  
其の如く引く其の如く其の如く  
其の如く自由を下さりて其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く

六

傳ふる涙の中にかゝるる示されぬ折を窺ひ  
癖此を向ふ其の如く其の如く其の如く  
謂ふ下りし其の如く其の如く其の如く  
涯にのれり虎口龍鱗を醫ふ其の如く  
其効をききし其の如く其の如く其の如く  
調割を振さるる其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く

為りきり只眠るの如く合掌を正しく  
くもりその終りきり于時安政乙卯七月  
三日享年五十六歳ありたしふ福壽あり  
境内に出るいそぎあり墓墳をたむそ地の  
眺望に士峰足柄より是よりいそぎあり  
耕田より及ふ子歳不朽の芳名を録され  
かす時戸の風素よりその生涯よりたふ

海に極ありんぬあり侍を感して心  
をりきり福をいそぎありその草の  
生り只そ波よりいそぎありその草の  
の侍より終馬よりいそぎありその草の

安政乙卯文自

於牌前 園 物 翠 出



阿沙潤葉の霜々々の際より人  
維彼小亦ささむ暇暇りの散り  
夕の辞此々の散りて望り色  
辞甚なる水にゆる祖翁を傲ふ  
勇々あはれ唯おのの拙きを  
そとてしと辞此をさるるに  
あはれとては是とていふも  
一言ありとては眉をよめ  
袂をよめとては各自に  
夕邊ありとてはれに  
能くはけりとては  
聊々との望りて侍り

あはれとては後りて相一葉

破車居士

自らも骨を食ふるに似たり  
 由儀  
 うり物も不待ともなる所鳴き  
 得基  
 川の奔利子町なる所なり  
 古基  
 雑庫の地帯にありては生  
 物翠  
 白きもの成る所なり  
 白  
 杉山の如湖の河の所なり  
 五英  
 大車もなるを鉄瓶の形なり  
 一秋  
 何れも飛く獨りありては  
 琴月

云世もくはくは雲の煙生  
 雨桐  
 云たれを籠りては跡の柳  
 桂山  
 御傍の所なり子色は  
 田所  
 たすみなる人なり月を  
 白起  
 刀きき方也不自由のあり  
 留本  
 海をくちりては色  
 松見  
 腰のけ臺にありては蓋物  
 翠巖  
 うき清なるも見る所の衆  
 丁知

志をくくつてくもくもく懐の羽  
 其芳  
 只結よりまゝの字夜の能き如く  
 美ふ花  
 伯母子の事も昔の顔をもつり  
 桃園  
 恥のくくつてくもくもく  
 滝江  
 成の泡の乾くも磯の磯  
 葛野  
 石切の響くも死なず日海に  
 志遊  
 或の情もつてくも物も龍  
 素悠  
 鐘の響くも表を松偲み如く  
 東鳴

十

釣つて釣つて汁のみ煮る 暮 糸  
 能書み通つて利の如く買葉 葉彦  
 公家寺の如く候親をまゝ 晴里  
 植込をまゝの道へ移る 他は自 佳悠  
 何もの志もくく 垣胡の如く 秋里

右に福壽寺一巻  
 合流頓首

潤葉をきくわくしつゝ  
像のあつせふ葉のつふと  
まこゆしつゝぬきちきり  
おもふはあつたふらふ  
うらふあつたふらふ  
おもふはあつたふらふ

あつたふらふ

得善

ハ祭師のふをわくしつゝ  
おもふはあつたふらふ  
うらふあつたふらふ

十一

秋とてぬきぬきぬき

丁知

老ゆきつゝ水多月の中  
あつたふらふあつたふらふ  
おもふはあつたふらふ  
うらふあつたふらふ  
おもふはあつたふらふ  
うらふあつたふらふ  
おもふはあつたふらふ  
うらふあつたふらふ  
おもふはあつたふらふ  
うらふあつたふらふ

秋の露乃よりおあゆむわの月しや

由儀

亡城生世の中 秋露乃り 掃竹の  
軸物より子附る甘く月影かろく毛  
恩深海より末永くの珠重き合きり  
あつらふ事此まゝにぬきをいふきん

竹泣ぬ後を葉をの 合とけ

一秋

老あかしく かの露乃あやむ 時々の  
まきしきふら子らも 健きなり 月ひ  
物下且に秋 且に涙かこみお月影の  
まゆみ子み旅のまきめせしきしき  
月うつるも 秋をぬき 病の床つら  
終ふ月と日おきなり 月ひあまの

数子入あひぬ 枝葉のかきしつら  
あやうはつら子 子ら 真羽後 不あひ  
日ひいしきこれ 何なりも けえぬり  
うらとこれの 風色 去道の 交際何れと  
まきしき 秋あはれ 日ひ 月影 月影  
わつら 秋あはれ 後 仰り 子ら 月影  
秋風を 葉を 枝 月影の 寂しき  
らあ 一つ 葉の 風子 月影 寂しき  
とら 只 秋あはれ 合き 月影 月影  
言葉 秋あはれ 月影 月影 月影  
旅 月影 月影 月影 月影 月影  
切 月影 月影 月影 月影 月影

甲斐乃 必由露乃 月影乃

守 黒

あゝの春年契り乃席い  
おちゆり一人佳うねおと  
老浦子まみゆうと妙のく  
綴らせしとるく具いりる國  
交わしつみゆりる風吹か  
しきるくはい桜木子の  
まひこの程めくもむか  
申よりをまをたもとう  
あひこ志うの涉るる福  
枝をまむ隙くあい  
あいしうつまも  
おひしやあつと  
あひひあつと  
之ー思ひて寝合も  
唯く袖をまもあ

あゝの春年契り乃席い  
五英

浦才お  
子  
あ

あゝの春年契り乃席い  
柏葉

佳  
著  
あ

此歌仙二卷之表所引之歌  
は、その陰葉井子縁を、何れも  
満尾まゝのたれか、と推して、或は

雨とさ記竹を戸傳ふ所々も  
風呂を阿をさすりあふまは  
此夏も添細之を手間か那  
網を帯のほろくくも  
一と押しふ来ると片寄る月の  
柱月満下寄中一冷つと

守 黒  
由 儀  
醉 車  
柏 翠  
五 英  
黒

積酒を飲つて吐き出す  
とて身延を二度と好め  
焚料の標に落葉を留め  
仰みし神か歌謡の歌やけ  
よき此格に神縁の身の中を  
おぼし大に小海を橋あは  
一面に棉を吹立ぬ自取  
露を多に給はしき家

儀 車 翠 英 儀 車 翠 儀

多し多みの鏡を磨くは秋の隙  
届つて往きし歸來の長尾  
方くおむの装うを初まらば  
りしを迹好く學の又帰  
着合子成るは在屋の若のまらば  
初下詠提すわらぬま福橋  
只あつた目まをさうう花丸  
盆を葉まき棚りたり能

英 儀 翠 車 翠 英 儀 係



富の落ははらきく 田の粒は  
 踏り来々 糸の物さくや  
 年暮道下 疎きれくも 寮住居  
 五郎太 投つて 鳩のさつり  
 紐で平は 槍の柄り 及びり  
 よれく 時分 歩む 踏 白  
 突牛の 癖の 愈り 月の秋  
 菊さの 花さ 葉乃 水切く  
 車 儀 忌 英 翠

樞を 棄て 終 仰の 終り あり  
 葉を 飲ん 毒忌 世の 勢  
 子へ 嘆止 小 里を 一く 桑毒  
 富の 存る 糸の 葉下 遠く あり  
 友を 成さ 糸の 絆の 危  
 蘇乃 踏み 糸の 岩 あり  
 車 儀 忌 英 翠

龍のすゝのくさききりしりし  
 新紅玉 袖紅玉 赤紅玉 紅玉  
 寶珠紅玉 通紅玉 玉紅玉 紅玉  
 扇紅玉 乃紅玉 紅玉 紅玉  
 寶色紅玉 粒紅玉 紅玉 紅玉  
 紅玉 紅玉 紅玉 紅玉

手洗の先紅玉 紅玉 紅玉  
 茶出の先紅玉 用紅玉 紅玉  
 朝夕の紅玉 紅玉 紅玉 紅玉  
 結むる見紅玉 紅玉 紅玉  
 内務の紅玉 紅玉 紅玉 紅玉  
 各通紅玉 紅玉 紅玉 紅玉  
 雜魚洗紅玉 紅玉 紅玉 紅玉  
 泥子紅玉 紅玉 紅玉 紅玉

物事一に清河のふたは下軍の  
望も盡く書畫の所々々々  
日當り少く清く此の世  
寂く里を歩み海若素の聲  
芥子<sup>二</sup>の森に在るの長楫を  
くふく空の森の船ハ有  
崇良初瀬頼るれ物の一々々  
久くく旅行の麻痺を述べる

黒 儀 車 翠 英 尾 儀 車

年多けの婦子のまをぬ針仕子  
おのこ出くく夢をくく如不  
阿のまに降るく如く是指を  
堪能際く信不 嬌乃子  
内金を換子本口を止く是書り  
有るをくくく如く秋 空  
法形くく竹藪りくく書の自  
本魚の押く年 虫の春のく

翠 英 尾 儀 車 翠 英 尾

改先の三四秤糸札付一  
 茹るも厚く如蓮根の  
 高るもゆるみ取き南窓  
 植替くとも是乃を芳きの  
 穂きみ吹くもよき一葉なり  
 日ふもゆるくも結乃をきぬ  
 儀 忌 英 翠 車 儀

漁乃多居たのれき春水月 得 暮  
 間遠子鐘のききも勢きくも 醉 車  
 空惚子落角りなきも取くも 暮 車  
 将基もよほり法も歌口ゆり 車 暮  
 一物もに晴よりたも多ゆり雪 車 暮  
 冬も傳左り川 暮 乃 暮 天 車

地子をくろく人きかたぬ隠居料  
 茶と何事も嗜む梅酒  
 閑靡小をた極くそそ見合沙汰  
 笑ひ止む一部屋のちのそり  
 を路の路ぐく河のりぬ他  
 本み枝くそり唱極そりあ  
 耳よりに守りか嬉しき極  
 月の化よりお上まゝ一人きき

車 墓 車 墓 車 墓 車 墓

子相より伝きく目くる恩中を  
 此符囉くそり愈る後  
 暗きつぬ暗極くそりつぬ  
 町より在りおきやのち代孝  
 のちそり何事竿の和布の白い立  
 仮名官中本娼藝者利

墓 車 墓 全 車 墓 車 墓

車 暮 車 暮

折ふ一はるるをのさき  
次第をえむむにけし

秋一と白霞をえし物る	秋の河原	由
以世世のつらのみをけし	秋の月	白
下落の原のふさぎを	秋の月	起
孝節や世のさへく	秋の月	暮
昔月や河のつら	秋の月	行
待らぬ来し秋の月	秋の月	休

丁 知  
 耳たのやちいさ記多子露りある  
 對 甫  
 蒼空や露のさききぬ 縮むる  
 ときを  
 野の少家月をえあう 葉細工  
 文 生  
 輝の地をさむきより 水も 月  
 五 雀  
 暮の葉はさきつるらきや 秋の月  
 玲 舟  
 後れ月先影のたしを ぬのら  
 未 洲  
 うらや月さく空のりたぬら  
 五 馬

瓦 村  
 群多きまらむれぬまらけの埜埜  
 四 端  
 雲下れを 暮のさきく 九月に  
 波 鶴  
 春のけさの 緑のたし 水は 秋の 暮  
 拙 誠  
 空のまやとまき けりぬ 露のさき  
 一 夢  
 十六宵と 吐つ 行小舟より 柳  
 樹 石  
 晴に 飛あがりや 鐘の けり ち 方  
 抱 叔  
 映る 万を たるむらり ち 暮の 聲  
 完 鶴

見たりは子無りりるん自の底 味全  
山崎は素直に一軒や秋に風 古  
之より行はるる倦き自取集 子之  
色くは如れは年より春は如り ことく  
稽田一水のみに素直な稽 宿 留本  
うけ稽は此故田より自やと如 呂風  
古是や本より石より若りみち 休盤  
人如ありりは自是より素直な 神盤

廿三

簾出ながらゆく楽を自のく如 弟粒  
ハ歎や此嘆のりよと何 望 叩自  
板口をまゝに下りふとやんま自 芽基  
古稽やまゝといさういりる如り 山子  
今も昔もは露おろすかかきうれ 吾吟  
中 古稽や何れもまゝのまゝ人をも見 山子 平民  
色つるは角力踏くは縁白うれ 自拵  
晴まき水のよりまゝの白何しう菊 為山





初月やうへ人通ふ野々清 水海 有岸  
 小菖結お中 一ひの燈 暮 芥 空  
 紫の戸やまのふに板も多き秋 梅 通  
 ありきこれに晴るも夕月あり 公 成  
 枝川の流ゆりつゝに字紅葉 此 美  
 秋の夜も人きり秋や及の月 如 子  
 秋深し字もよとく 傳 行 晴 晴 吾 山  
 秋の心はもる妻戸も秋の月秋の 麻 交

廿五

之月や野々人の見ゆ 緑 水 先 原 郎  
 中へももるももるももるももる 羽 重  
 有文の末もあつた 秋の風 安房 欣 自  
 山とくもるもるもるもる 秋 函 雅 山  
 川へもるもるもるもる 秋の聲 文 砥  
 新戸出り 捨りや秋の如れ 扇 上毛 心 足  
 来りしはもるもるもるもる 秋の音 宋 室  
 霧の如くもるもるもるもる 秋の音 不 際

日しるすも物さる月と骨ハ風棲  
對しつゝ秋立も水瓶の露 茶湯  
我をのそとく集りあはれ少納<sup>ヒキチ</sup> 孝江  
大空や只るもまらぬ天の川 石台  
秋風やまのふり似きる心ゆれし 音好  
字多きものさたりぬや咲枯枝<sup>ヒキチ</sup> 踏成  
日にお遠き山を渡るも花葉あり 好静  
暎初る秋も春風のくぬ日葉 竹裁

あき秋くつひる紅葉や篋口<sup>ヒキチ</sup> 多代女  
多病くも小童もよりぬ秋の暮 一止  
秋多や秋風晴る、幾日ぬや 遊阿  
舟中もまの舟より晴る相一葉 清民  
七夕も糸よりつむりや字 木自  
自下も糸よりつむりや字 江三  
稻妻やあまの雨に津ぬのをあは 舎用  
秋風乃聖衣<sup>カキ</sup>のまきや水屋口<sup>カキ</sup> 清知

誇る能くしゆくはくまの也葉のを十六 景左  
漣小秋立浦の 水日しの柳 素屋  
各ありて一蓮子度る自身也 和鄰  
きりかう侍もくえんこつや茶もはに 岸一  
白き星の光也 銀 河 下丹 河 宜  
交自也旭うけ露なき芦 簾 旭 高  
面白きゆ。侍もくえんこつや茶もはに 兎 心  
落くも毛拾りて此代を相一葉 見外

廿七

鬼灯の燈みゆへくみく結田姫 祖心  
眼を水もくまのこわし 月の南 キイ 閑 那  
四五本をたよるも 柳一ぬ月の聲 物外  
馬の口洗もくまのこわし 葉の心 是利 紗袋  
新は黒き秋はよりをたのこわし 新  
子所一姥もくまのこわし 秋の月 トサ 習作  
星はくまの露もくまのこわし 柳叩き 和 り高 纏 岳  
初秋也星はくまのこわし 柳の心 り高 双 鳥

夕のあつち船の焚火や月明りヲ介  
 而後 旅人の子もつて世々 遊ふ自新作 自底  
 紅葦ややうり 紅露を空の上 石見 喜池  
 物類もあつちか 共住居や 一柳  
 野分しと井の春もまきうらり 六十一 南々  
 多きうたあま子 下町へ女郎を 塘桑  
 野分しと井の春もまきうらり 六十一 南々  
 柳もあつちか 共住居や 一柳

一いつちの春を遊遊の遊居を亦  
 到春遊子傳の春

隈あまや秋の初燈わつち 金波  
 海買つち 黄葉囀あつち 巴 回  
 牛の鞍干し 春の露は 柵の 穂 麦 春  
 引浪を浪の 花 春 野分 春 春  
 行人の 影も 春 春 春 春

人知くり碁子立たり 秋の暮 麦宜  
 素くくむ子著くく宗や秋の暮 春高  
 里くの母華子見ゆる 躍りぬ 一庵  
 枝川や一瀬子集りく九月月 堂山  
 秋高や若れ戸口若れり 杜山  
 唐崎川ふみかたれり 秋の暮 文磯  
 宿妻や二人と志とる 秋の暮 文友  
 立秋の兄ゆや子の我きく 碁子

廿九

何れと秋ら道ぬ秋や暮 素悠  
 きくくく向ふふ秋やちく柳 貞柳  
 流折水子秋の暮 夕アウレ 柳枝  
 身とくみ秋の暮 素悠 素悠  
 我子とくくくくく秋の暮 孫和  
 秋高くくくくく 松江 松江  
 人声は絶て其以唱 秋高 月桂  
 秋高のくくくくく 貞高 貞高

高平梢の秋は身たるわが家  
 秋の水海の中は清涼き利  
 舟子舟を、新雪の鐘をうきり  
 つゆくわくもや交月の宵の空  
 晴地の露子清きわ行うれ  
 交月やとみ人のあはれ只ら  
 三日月の輪は、佛のまにま  
 初秋や暮るの夜を五位の聲  
 翠巖

三

新秋の月を、暮るのまにま  
 日和の鐘と、露の戸口  
 昔月の空は直きや、河の  
 吹かけの日和を、まのまにま  
 山蔭や只何れ、露のまにま  
 舟子舟を、新雪の鐘をうきり  
 新秋の秋の涼きを、舟のまにま  
 暮るのまにま、月を、まにま

秋重  
 皆佳  
 在案  
 高香  
 蓬雪  
 志趣  
 澄江  
 暮林

山際や磯一変 町一変 物園  
 晴即ちの清き鳴しそ音も華り 榮松  
 月夕の鐘の待たそそ月の月 岩岩  
 水底の月とそそり 紅葉鮒 青物  
 吾氣のそそり 折鶴とそそり 時節  
 水無にそそり 秋の空とそそり 如燈  
 風香のそそり 夕暮とそそり 桑貞  
 町にそそり 夕暮とそそり 桑路

世一

静き社ありそそり 露の出居道より 住徳  
 露付そそり 秋の空とそそり 山児  
 白の秋やそそり 夕暮とそそり 合壽  
 早稲のそそり 夕暮とそそり 桑芳  
 送りのそそり 夕暮とそそり 桑之春  
 初稲のそそり 夕暮とそそり 桑重  
 荒川のそそり 夕暮とそそり 如燈  
 丁のそそり 夕暮とそそり 知破



白の日は秋を如き道子行隣  
 白相  
 昔隣や後居るも 秋の燈  
 是は  
 消きぬ如し行灯や虫の聲  
 葉自  
 秋露の晴月を船に在る  
 一水  
 柳の中を舟引月如く  
 相居  
 夏後さす野に舟舟の家  
 禾道  
 秋の秋舟うけ向ふ舟の  
 船下  
 舟の舟の廣き舟舟の舟  
 舟若

卅二

法蓮くの舟より舟なるも秋の舟  
 一枝  
 舟の舟の秋を押さる舟舟の舟  
 秋里  
 鐘の音舟舟の舟の舟舟舟舟  
 琴松  
 かきこもる秋立舟の舟舟舟舟  
 桂山  
 舟舟の舟の舟の舟舟舟舟舟  
 田舟  
 舟舟の舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
 舟舟  
 舟の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
 舟舟  
 舟舟の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
 舟舟  
 舟舟の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
 舟舟

東の海ぬりの花路の表りさき

晴里

家あふり我のさきさき秋の音

宜山

名月や誰か居る時を峰の鐘

守黒

さきさきの秋の音

五英

雪の音や暴風おの人のさき

栢翠

さきさきおの人のさき

由儀

あはれは由縁子相を愛ふと名つても

つ葉を揺めいふさきさきさき

つよさきさきさきさきさき

見よにさきさきの庵を潤葉ふ井

小群鳥はけいさきさきの音

つよさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさき



そとに書きたるは  
云はれりか多し  
なれども

事仙度丁知

世中

